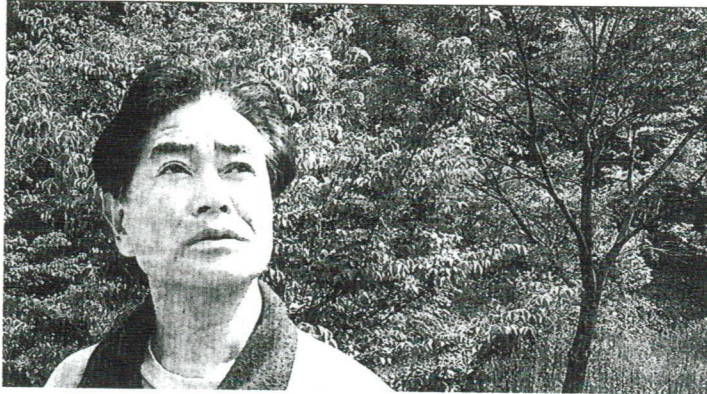


# ひと

福島の子どもを北海道長期キャンプに送り出す

しんし とおる  
進士 徹 さん(55)



草の匂いがする福島県南部の山あいの集落。5坪の田畑を耕しながら、春休みや夏休みに、都会の子どもを対象にした山村生活の体験事業を23年間続けてきた。

東京生まれの東京育ち。田舎暮らしとは無縁だったが、長男が4歳の時に、土に触ると「服が汚れる」と言われる東京の子育てでいいのか、と考えた。子どもは本

来、どろんこが好きなはずだ。仕事を辞めて家族で鮫川村に移住し、地元の人に畑仕事を教わりながら山村留学を受け入れた。

やって来た子どもたちは虫捕りをしたり小川に入ったりと、滞在の数日間、飽きることなく、はじける。一日中、穴掘りに夢中の子もいる。「日常で子どもらしさを失っていたんだ」と感じる。

その「子どもらしさ」を大人が奪う出来事が起きた。原発事故で、屋外活動は制約される。地元の放射線量は問題ない値だが、不安に配慮し、200人を見込んでいた夏休みの受け入れをやめた。

代わりに仲間たちの協力で、県内の小中学生540人を1〜5週間、北海道のコテージや農家に滞在させる自然学校を企画した。参加期間に関わらず個人負担は3万円。あとは寄付金で賄う。予約開始直後に満員となった。

「福島では子どもの我慢が日常化している。大人の責任で、せめて一時、のびのびと羽を伸ばさせてやりたいんです」

文・写真 渡辺康人